国,際会議　「中立・非同盟諸国と核不拡散体制」
The Neutrals and the Bomb:
Neutral & Nonaligned States and Non-Proliferation
報告書

◆　日時　2019 年 12 月 14-15 日
◆　場所　GRIPS　1 階 ABC 会議室

◆　招聘者名　別添リスト参照

◆　参加人数　12 月 14 日 47 名（外部参加者 39、本学学生 3、教員 5）
　　12 月 15 日 42 名（外部参加者 34、本学学生 3、教員 5）
◆　企画した教員名　岩間陽子

◆　プログラム　別添

◆　発表資料　別添

◆　当日の議論の内容
12 月 14 日　（土）
09:30-09:45 歓迎の言葉
主催者を代表して、岩間陽子とパスカル・ロッタより、会議の背景、位置づけ、趣旨に関する説明と、歓迎のあいさつがあった。

基調報告　09：45-10：30
Mervyn O’Driscoll コーク大学教授により、“ Frank Aiken, the Irish, and the NPT”と題して、アイルランドと NPT の関係についての報告があった。まずそもそもアイルランドが NPT の提案をするにあたり、当時のアイケン外務大臣の考え方や果たした役割について述べられた。次いで、1975 年の第一回レビュー会議開催にあたって、アイルランドが果たした役割の重要性について報告があった。全体として、NPT の制度としての柔軟性のおかげで、非常に長期間にわたって有効な制度であり続けたとの主張があった。

◆　第 1 パネル：Neutrality, Nonalignment, and Non-Proliferation 11:00-12:45
　ジョナソン・ハントにより“Between colonialism and community: Neutral and Nonaligned Nations in the Making of a Postcolonial Nuclear Order”と題して、60 年代の中立・非同盟諸国が脱植民地の秩序を作っていく過程で、ある種の人種主義が大きな役割を果たしたことについて報告があった。
　次いでパスカル・ロッタにより、“The ‘Neutral Idea’ after the Second World War”と題して、19 世紀から 1945 年までと、それ以後の中立概念の変遷に関する報

告があった。特に冷戦期には、永世中立概念に焦点が移り、一時的な中立は注目されなくなった点の指摘があった。

レヤート・ベッテルからは、“The Nonaligned Movement and Nuclear Disarmament”と題して、核軍縮運動における非同盟諸国の役割について、これまで全く研究の対象として注目されておらず、重要性が過小評価されてきたことについて報告があった。

ハーバート・レギンボーギンからは、“European Neutrals and Nuclear Non-Proliferation”と題して、中立諸国で核兵器に対する否定的評価が定まっていく過程での思想的潮流に関して報告があった。

第 2 パネル: European Neutrals and Non-Proliferation: 14:15-16:00

John Noble からは、アメリカとインターネットで結んで、“Casaroli and the Kremlin: Contextualizing the Holy See's Accession to the NPT”として、NPT が作られる過程で、軍隊を持たないバチカンがどのように関わって行ったかに関する発表があった。

鈴木悠史より、“Pressures on nuclear states. The Proposal for a Non-Atom Club and Swedish Diplomatic Effort for the Creation of the NPT Regime”として、スウェーデンが中立国として軍縮政策でリーダーシップを取るようになる過程における、ウンデーン外相による、非核クラブ構想を紹介する発表があった。

続いて清水謙により、“Swedish Security Strategy during the Cold War – The Soviet Threat and Cooperation with Western countries”と題して、戦後スウェーデンの脅威認識と中立政策がどのように関係していたかについて発表があった。

最後に Thomas Jonter により、“Sweden and the Bomb: From Nuclear Acquisition to Nuclear Disarmament”として、50 年代から 60 年代にかけて、国家安全保障と核の果たし得る役割に関するスウェーデン国内の認識と政策変化に関する報告があった。

第 3 パネル : European Neutrals and Non-Proliferation II 16:30-18:30

第三パネルでは、Benno Zogg が Andreas Wenger との共作で、スイスの核政策に関する冷戦期の変遷に関して発表した。

Heinz Gaertner からは、オーストリアの非核政策に関して、60 年代から現在の核禁止条約署名に至るまでの考え方に関する報告があった。

さらに Marko Miljkovic より、“A Love and Hate Relationship: Yugoslavia and the NPT”と題してユーゴスラビアが 1970 年までは核武装計画を持っていたこと、その背景に関する発表があった。

各セッションとも非常に活発な議論があり、初日はこの後、会議室 C においてケータリングを入れてのレセプションがあり、会議終了後も引き続き熱心な議論が続いた。

12 月 15 日（日）
第 4 パネル：Africa, NAM, and Non-Proliferation 9:00-10:45
Anna-Mart van Wyk により、南アフリカの核武装に関し、どのような脅威認識で、どのようなシナリオをもとに開発されたのかに関する発表があった。
Robin Moeser は、南アフリカの核武装の思想的背景と、後に核兵器を放棄するに至ったことの間の関連に関して、1988-91 にアフリカ非核兵器地帯構想が持ち上がることも含めて発表した。
Hassan Elbahtimy からは、エジプトが非同盟諸国のリーダーとしての立場と、その核政策をどう統合していくかの試行錯誤をした過程に関する報告があった。

第 5 パネル：South Asia, NAM and Non-Proliferation 11:15-13:00
このパネルではインドの核武装に関する発表が 3 つあった。Joshi Yogeh は、中国の核武装を控えて、インド内における脅威認識と対処の議論、核武装と核不拡散に関する政策対立の内容に関する報告をした。
Kanica Rakhra はインターネット経由で参加、インドにおける非同盟、中立に対する態度と、核武装の間の思想的な矛盾に関する発表があった。
Nidhi Parasad からは、核の選択に関するインドと日本の決定の違いに関する比較の報告があった。

第 6 パネル：NAM-Observers, NAM-Outsiders, and Non-proliferation 14：15-16：00
Carlo Pati から、ブラジルが当初非同盟諸国の中で活発に活動していたにも関わらず、当初 NPT に参加せず、ラテンアメリカ非核兵器地帯構想の方に転じて行く背景について発表があった。
Andrey Edemskiy からは、1961 年のソ連による核実験再開と、ジュネーブでの軍縮交渉における「中立諸国」の関係についての報告があった。
Mariana Budjeryn はウクライナが 1991 年の独立後、ソ連から継承した核兵器を放棄し、安全と領土一体性の保障をブダペストメモランダムで得て、NPT に加盟する決断をした過程を扱った。さらに、安全保障がどのように諸国の決断に影響するかに関しても短い考察があった。
Exequiel Lacovsky は、南米のトラレロルコ条約について、それがキューバ危機の直後に成立した過程を説明し、どのようにその後の他の非核兵器地帯条約のモデルになったかについて報告した。

第 7 パネル：East Asia and Non-Proliferation 16：30-18：15
Xin Zhan は、中国が当初は NPT を全く拒絶したが、途中から半協力国になり、その後加盟国に至るまでの政策変化の過程を、毛沢東時代のイデオロギー先行の政策から徐々に国益中心の外交に変わっていくことで説明した。
岩間陽子は日本が 60 年代のジュネーブにおいて、18 か国委員会への参加を求めて行く過程で、中立・非同盟諸国の潜在力にほとんど注目することなく、西側先進

国頼みの外交を行った様子が報告された。

武田悠は国際核燃料サイクル評価(INFCE)1977—1980 年の交渉において、供給国グループと中立・非同盟諸国の間に対立があり、その間で日本外交がどのような立場を取ったかについて報告があった。

◆ 総括

今回かなり大規模な会議であったが、この問題に関するアカデミック・コミュニティのコアの部分の研究者と、これから作業をしていく若手の双方を集めることができたのが最大の収穫であった。年配の研究者間は、すでに知り合いである場合も多かったが、ほとんどが初来日であり、お互いの間と、さらには日本のコミュニティとのネットワーキングができたと考えている。今後、ウィルソンセンターの The Nuclear Proliferation International History Project (NPIHP)との共催の会議を開催することも考えており、ますますネットワークを緊密にしたいと考えている。

全体に非常に活発な議論が交わされ、参加者からはこのような機会を持つことができたことに関する、感謝の意がたくさん伝えられた。会議の模様は HP で公表している。http://www.nptresearch.org/picturespresentations.html

今後、発表の中で、いくつかの出版計画を立ち上げるつもりであり、その過程でさらに問題意識を絞り込んでいくつもりである。具体的には、まず欧州の中立諸国が安全保障と核不拡散の問題をどのように考えていたかという問題の出版プログラムをまず先行させ、同時に非同盟諸国をいくつかのイッシューで分けて、さらに研究グループを作って行くことを考えている。

EPSON
THE NEUTRALS
AND
THE BOMB

Mervyn O'Driscoll

Marko Milijkovic
Benno Zogg

全体に非常に活発な議論が交わされ、会議の模様は HP で公表している。
http://www.nptresearch.org/picturespresentations.html

N＋N国際会議にての報告及び全体の流れを以下の動画サイトにて閲覧できます。

https://www.youtube.com/playlist?list=PLgfli1PY64h19MkOGMjoy_DEOrOAxaXg8

以上